

湖南大學嶽麓書院秦簡を拝見して

小寺 敦

1. 嶽麓書院秦簡発見の経緯

嶽麓書院秦簡については、日本国内でも既に西山尚志氏が、新華網の第一報の記事⁽¹⁾などを引用しつつ、その概要を記している⁽²⁾。この掲載誌は中國出土資料學會關係者以外が閲覧することが困難なものなので、以下、短く纏めた上で簡単に紹介しておく。

2006年12月、湖南大學嶽麓書院副院長の陳松長氏が香港の學術會議に出席して、香港中文大學教授の張光裕氏に會い、秦漢時代の簡牘が國外から香港文物市場に流れてきたとの情報を入手した。なお、張氏は上海博楚簡をその骨董市場で発見した人である。その後、張氏に薦められ、12月14日に香港の骨董商から十數枚の簡牘を見せてもらった。

2007年11月、陳松長氏は全竹簡を見た。これらの大部分は竹製であり、少量の木簡もあった。陳松長氏は、これらが漢代か更に古い時期のものであると判断した。簡牘は全て二つの長方形のプラスチックの盥に浸けられており、水はすでに黄ばんで、簡牘の傷みはひどく、簡牘の外層表面にはすでにカビがあった。陳氏は、「もしこの簡牘の救出処理が間に合わなければ、完全にダメになるだろう。」と判断した。その後、陳氏は「我々がこの文物を救い出すのは、一種の責任である」とし、嶽麓書院が簡牘を購入することに決定した。

2007年11月末、骨董商と交渉を行い、150萬元（約2250萬元）で購入することを決定した。12月10日、骨董商は長沙にやって来て、8束の簡牘を嶽麓書院に渡した。その時の簡牘について嶽麓書院の研究者は、「簡牘の破損がひどく、真っ黒になって括られており、はりついてしまっている麺のようだった。」と述べたという。

それから「出土木漆器保護國家文物局重點科研基地」學術委員・湖北荊州文物保護中心研究員の方北松氏らによって、簡牘の洗浄・整理・脱色の処理が行われた。この救急作業は4ヶ月続いたらしい。別のニュースソースによると、2008年1月26日から4月13日までの間、この簡牘は清華大學・中國文化遺產研究院・武漢大學簡帛研究中心・香港中文大學・湖北荊州博物館・荊州文物保護中心・湖南省文物局・湖南大學などの歴史學者・文物考古學の専門家の科學鑑定を経たという。現在、脱色された簡牘は、ガラス片によって固定され、嶽麓書院の文物倉庫内に保存されている。

本簡牘の眞偽判定は、清華大學教授の李學勤氏を初めとする中國國內の専門家によってなされ、簡牘の字體・内容・老化狀況・ミクロの傷跡の分析など多くの面から分析し、これを貴重な秦簡であると判定したようである。処理後、この簡牘に計2098の編號が附された。完簡（殘缺・破損していない簡）は800枚餘り、比較的整っているのは1100

～1200 枚ある。筆者（西山氏）が思うに、編號は合計 2098 あり、完簡が 800 枚餘り、比較的整っているのが 1100～1200 枚となると、各メディアが繰り返し強調している「簡牘の傷み」と矛盾するような氣もする。しかし、これらは實際見てみなければわからない。

簡牘の抄寫年代については、中國文化遺產研究院研究員の胡平生氏は、この竹簡の字體の多くは秦古隸の風格があり、かつはっきりとした秦代小篆の特徴があつて、嬴政の諱を避けているが、劉邦の諱を避けておらず、また「廿六」・「丞相状」・「丞相綰」などの内容は秦詔版に見え、文章の語氣は里耶秦簡と一致しており、例えば「居貲」などといった多くの秦代特有の言葉が見られる、と述べている。

また、武漢大學簡帛研究中心の陳偉氏は、おおよそ秦始皇の六國統一前後に書かれたものであり、簡牘には「蒼梧」や「洞庭」など里耶秦簡にも見られた秦代の郡名が見えるという。

2008 年 4 月 13 日午後、李學勤氏は、この秦簡は非常に貴重なもので、先秦文獻の多くの空白を埋めるものであり、主な内容は大きくは、律令と法律文書・案例・占夢書・算術書などこの四つを含んでいる、と述べている。

また、簡牘の内容には多くの官員使節の記載があり、湖北内の古い地名がいくつか出てくるので、専門家は湖北の出土の可能性があると判断しているとも報じられている。

この簡牘に書かれている地名について、陳松長氏は、州陵郡・清河郡という、「秦朝四十八郡」の中にはない 2 つの新たな郡がみられ、「丙辰朔己卯南郡假守賈報州陵郡」という文もあり、「州陵守」・「州陵段守」の語は少なくとも 3 回現われていると述べている。また、はっきりと篆書で「清河段守」とも書かれており、州陵守と州陵段守はどれも一級の官名であるので、まだこれらが縣名の可能性も排除できないが、州陵・清河は郡名である可能性が高いとも述べている。その他、衡山郡・泰山守・廬江段守などもみられ、これらは以前ある學者が漢代に初めて設置されたことに對して疑義を抱いた郡名であり、秦代に設置されたことを證明する證據が足りずに苦心したものであつて、この秦簡は考古學を學ぶ者に新たな證據を提供するものとなったとも語っている。

以上が嶽麓書院秦簡發見の経緯である。香港の骨董市場で買い戻されたというところに引っかけりを感じたが、これがもし信頼するに足る資料ならまさに重大な發見である。記事からは、簡牘研究の權威者たちがこの秦簡にお墨付きを与えていることが窺える。しかし、そうだからといって現物を見もせず、そのお墨付き全てを鵜呑みにするのは、いかがなものかと思われる。

そういう時にちょうどよいタイミングで、谷中信一を研究代表者とする平成 20 (2008) 年度基盤研究 (B) 「新出土資料を通してみた古代東アジア世界の諸相—漢字文化圈の中の地域性—」のメンバーは、この秦簡を所藏する湖南大學嶽麓書院副院長の陳松長先生よりお招きを受け、2008 年 9 月に調査團を組織して湖南大學嶽麓書院を訪問することになった。そこで次に本秦簡見學の印象を中心に述べていくことにしたい。

2. 湖南大學嶽麓書院の訪問

2008年9月10日はいかにも湖南らしいというべきか、気温30度を超す蒸し暑い曇り空だった。谷中信一（日本女子大学）を團長とし、名和敏光（山梨県立大学）・曹峰（山東大学）・私の4名からなる科研調査團は、湖南省長沙市の嶽麓山の麓にある湖南大学嶽麓書院を訪問した。

午前9時、陳松長先生自ら愛車を運転され、我々が宿泊する嶽麓山麓のホテルまで迎えにおいでになり、湖南大学キャンパス内の嶽麓書院へ向かった。陳先生によれば、これでも長沙としては涼しい方とのことであり、調査團一同、改めて中国南方の気候風土を実感したのであった。

嶽麓書院に着くと、とある建物に赴き、そこで整理中の秦簡を見せていただいた。この秦簡の正式名称は、「湖南大学嶽麓書院（所蔵）秦簡」とでも呼ぶべきかとのことだったが、やや長い気がするし、また「書院秦簡」と短く稱されてもいたが、これではどこの書院か分からないので、ここでは「嶽麓書院秦簡」と呼んでおくことにする。

さて、竹簡は1簡ずつガラスケースに密封され、水とアルコールの混合液が入ったプラスチックケースに浸されており、そのケースが研究室の壁際にずらりと並べられていたのは壮観だった。皆非常に興奮しながら観察した。保存用のアルコールを體が感じた。竹簡は全部で2198までの番號が記されてあったが、それ以外に、番號を付されていないケースに浸っている竹簡がいくつもあった。完簡は一見してかなり高いパーセンテージと思われたが、實際、1000枚程度あるとのことであった。無論、細切れの斷簡もあるが、保存處理の的確さのためか、文字は非常にはっきりとしているものが多く、文字の不鮮明さによる釋文の困難さは、かなりの程度回避されそうに思われた。

その後、「文昌閣」2階にある陳松長先生の研究室に案内され、そこで著書を頂いた。それから陳先生のパソコンに記録されている竹簡のカラー圖版を見せていただいた。まだ整理半ばで、篇ごとに分類されているわけではなかったが、「衡陽」・「新黔首」・「丞相」・「皇帝」などという文字が、見學者4名および同じ科研メンバーで今回別行動の大西克也・宮本徹兩氏によって確認された。「律令」では、「令」が圧倒的多数を占めていることは、まさに畫期的というべきであり、この秦簡が本物ならば、秦漢法制史に大きな衝撃を与えるものと期待される。筆寫者については、明らかに同一人物ではないとのことであった。

今後、圖版・釋文を出版するにあたっては、第1冊「占夢」（夢判斷の篇）・「爲吏之道」（睡虎地秦簡のそれとは内容が随分異なる）・「日志」・「曆譜」、第2冊「算數書」（官吏にとって実用的な問題が中心のようだった）、第3・4冊「律令」（令が多い）になる予定とのことである。出版時期は、2009年から2011年になる予定であり、釋文は中國語版の他、英語・日本語・韓國語版も出していくとのことである。カラー圖版を掲載するとともに、張家山漢簡二年律令の圖版・釋文⁽³⁾のように、赤外線カメラで撮影したいとも仰っていた。

釋文の作成については、あまり大勢でとりかかると、かえって面倒が起きやすいから、ひとまず自分達で作る、それから國際シンポジウムでチェックを兼ねた作業を行いたい

とのことである。

今回の竹簡に限らず、骨董市場で買い戻された竹簡には、多くの研究者が偽物の疑いを持っていると話を見ると、陳先生は、竹簡の電子顕微鏡写真を見せて下さった。睡虎地秦簡のように2000年以上経過した古い竹の場合、電子顕微鏡で撮影すると、竹の断面が真っ直ぐで、新しい竹だと繊維と繊維との間に繋がりがあるとのことであった。実際、電子顕微鏡写真における嶽麓書院秦簡の断面は真っ直ぐなものだった。竹簡成分の化学分析の表も見せていただき、睡虎地秦簡などとはほぼ同じとのことであった。

放射性炭素年代測定（炭素14年代測定）については、費用が高價であるために実施しなかったし、今後行うつもりはないとのことである。この嶽麓書院秦簡というよりは、この種の出所の不明瞭な出土資料に懐疑的な人々をますます懐疑的にする可能性があるのも、この方針に多少の疑問が湧かないでもなかった。検査にかかる費用を考慮の外に置くとすれば、最新式のAMS法なら、測定するための資料は微量で済むわけであるし⁽⁴⁾、先述の西山氏も既に述べていることだが、やはり炭素14年代測定には、かけるだけかけておいてほしいものである。しかしその後耳にしたところでは、陳先生も炭素14年代測定にかかる気が全くないというわけではないようである。それから長沙簡牘博物館の宋少華先生によると、空白簡に文字を書き込んで擬装した偽物があり、それは炭素14年代では本物の竹簡と判定されてしまうとのことである。このほかに資料汚染等、この測定方法自体につきまとう問題もあるし、炭素14年代測定を行いさえすれば、すぐさま真偽が判別されるといえるほど事は単純ではない。

竹が本物でも文字は偽物ではないかとの疑いも当然の如く浮かんでくるが、陳先生は、今回の竹簡は非常に柔らかく湿っており、そこに筆でくっきりとした文字を書くことは不可能ということだった。

晝前、研究室を辞去したが、空は晴れてきてますます蒸し暑くなった。嶽麓書院付近の「湖大印象」というレストランで陳先生と晝食することになり、辛い湖南料理で大量に発汗し、體がすっきりした。一同、湖南省の料理が辛い理由を了解したものである。仕事でお忙しい陳先生とはひとまずお別れし、湖南大學の巨大な毛澤東像前からタクシーに乗り、調査團メンバーはホテルに戻った。

3. むすびにかえて—出土状況の不明瞭な出土資料の真偽問題—

ところで嶽麓書院秦簡について多くの人が最初に考えることは、果たしてこれが本當に本物か、資料として用いて大丈夫なのかということだろう。この疑問は本秦簡の存在を知って以来、ずっと私の頭の片隅に居座り続けた。

19世紀末に甲骨文字が発見された時、これを偽物と考える研究者は少なからず存在したし、春秋時代以前の歴史研究を無意味・無価値とする高名な學者もいた。偽作の甲骨がこれまで数多く作られてきたことは確かだが、今では甲骨の全てを偽作とする者はいないだろう。また、出土地点・状況がはっきりしている睡虎地秦簡や里耶秦簡を偽物だとは誰も言わない。一方、出土地点・状況が不明であり、香港の骨董市場で買い戻さ

れたという点で、本秦簡とよく似た発見経緯をたどった上海博楚簡については、未だに慎重な見方をとり、一次資料として利用することに躊躇する研究者が少なくない。福田哲之氏はこうしたことに觸れながら、上海博楚簡の信憑性について述べている⁽⁵⁾。上海博楚簡の場合は福田氏もいうように、炭素14年代で竹簡・墨ともに前307±65年という結果が出ていることと、幸運なことに上海博楚簡よりもわずか半年ほど前に発掘され、その公開が発掘後約3年である郭店楚簡に、上海博楚簡に含まれる篇に類似したものが存在することから、最初の頃に公開されたものについては、本物と断定してまず間違いないものと思う⁽⁶⁾。今回の嶽麓書院秦簡については、7～8割の可能性をもって本物という感觸を得たが、2～3割の疑念は残る。この疑念はすなわち、この秦簡の文章中に含まれる新事実をもって、中國古代史を即座に書き換えることが果たして正しいことかということでもある。

嶽麓書院秦簡は、そういう意味ではグレーゾーンに属する資料ということになる。こういう資料は、出土地点・状況が明確な睡虎地秦簡や里耶秦簡などとは、研究対象として向き合う時に異なったものが要求される。つまり眞偽の判定を何よりもまず第一に考えねばならないということである。嶽麓書院秦簡の内容の与える影響が大きなものとなるのが容易に予想されるだけに、こうした疑念の払拭のために（場合によってはそれが強まるかもしれないが）、眞偽の判定を含めて本秦簡を検討の俎上に載せることは、無意味なことではないと思われる。ただ今後當分の間、この秦簡のみから見出される新事實は、括弧付きのものとして扱った方がよいかもしい。

先述の宋先生によると、かなりの楚墓が盗掘され續けており、今後も香港をはじめとする骨董市場に、偽物を含めて簡牘類が續々と現れるだろうとのことである。實際、清華大學が最近、大量の戦國竹簡を骨董市場で購入したというニュースが伝えられている。骨董市場の簡牘類が研究機關によって非常に高値で買い戻されていることは周知の事實であるから、本物の出現に呼應して偽物も大量に製作されることは極めて容易に予想される。偽作者の腕前はピンキリだが、名人級になると、ハイレベルな専門家でも容易に眞偽を判別できないものを製作することは、青銅器や甲骨ではよく知られている。簡牘類でも、専門家が骨董市場で偽物をつかまされた話はたまに耳にすることである。その割には簡牘研究の分野においては、甲骨や青銅器の研究と比較して驚くほど眞偽鑑定に無頓着である印象を受ける。ただ實際のところは、無頓着というよりは、出土事情の不明瞭な簡牘を扱う研究者と扱わない研究者に分裂しているだけで、前者には眞偽鑑定をほとんど考慮しない人が含まれており、また日本の場合、數的には後者がずっと多いからそうみえるだけかもしれない。

今のところ簡牘類に関する理化學的な分析方法として代表的なものは、炭素14年代測定法・電子顕微鏡撮影・成分分析といったところである。それ以外の分析方法として、書體や文章内容による方法もあるが、特に精巧な偽物に對しては、理化學的な分析と比較して必ずしも信賴性が高いとはいえない。こういう判定方法は、宋先生も仰っていたことであるが、本物をたくさん見て慣れるしかないのである。そうなると判定上、曖昧な部分が存在することはどうしても避けられないことになる。理化學的な分析にしても、偽作者側に相當高度な専門知識を持ち、すばやく新たな分析方法に對應することができ

る者がいることを想定すべきであり、やはり無条件に信頼しない方がよいだろう。

出土資料の眞偽をろくに確かめもせず、本物と思いこんで研究を進めると最悪の場合どうなるかは、考古學の一大スキャンダル⁽⁷⁾を経験済みの我が國では誰しも理解していることであり、今後、出土事情の不明瞭な出土資料の扱いには、これまで以上に慎重にならざるを得ないと考える。

そうはいつてもそうした資料がもし本物ならば、その散逸による損失は計り知れないものになる。また先に述べたことから分かるように、この種の出土資料について、100パーセントの信頼性をもって本物であることを論理的に証明することは、事実上不可能といつてよい。したがって、グレーゾーンにある資料を研究機關が買い戻すことは、やむを得ないことであるし（残念ながら、そのことがまた偽作を呼び込むことになるのだが）、萬が一偽物であっても、それが餘程稚拙な出來のものでない限り、買い戻した研究機關を責めることはできないと考える。今回嶽麓書院秦簡を買い戻された方々の判断は、そういう意味で妥當なものだったと思う。

新出土資料に書かれている「新事實」にのみ夢中で突っ走るといふことは嚴に謹み、網羅的に出土資料を収集しながら、利用可能なあらゆる方法を駆使してその資料の信頼性を確認していくことが、こうした資料を利用する上で要求される、しごく當然な基本的態度であろう。その結果、ある出土資料が偽物であるとの可能性が高まり、それを用いて進められた研究が全て露と消えるのも、研究の發展上、全くの無駄とはいえないだろうし、やむを得ないものとも考える。こうした問題が、ある資料を信じるか信じないかという、政治黨派や信仰心と同次元の話になってしまうことだけは避けなければならない⁽⁸⁾。

最後に、新發見の竹簡を見學するという、この上ない貴重な機会を与えていただいた上に、長沙滞在中、最初から最後までお世話になった湖南大學嶽麓書院副院長の陳松長先生、そして同院長の朱漢民先生、同院の姜廣輝先生に感謝の意を表す。また本稿の執筆には、科研調査團の他の3名からも協力を得たことを付記しておく。

補記：本調査報告は、「湖南大學嶽麓書院秦簡に関する雜感」（『中國出土資料學會會報』39、2008年12月20日）を加筆修正したものであり、また、平成20年度科學研究費補助金（基盤研究（B））「新出土資料を通してみた古代東アジア世界の諸相—漢字文化圈の中の地域性—」（研究代表者：谷中信一）による研究成果でもある。

注

- (1) 「透析秦簡回歸：流失海外文物回歸困局希望并存」（新華網、2008年4月13日、http://news.xinhuanet.com/newscenter/2008-04/13/content_7969373.htm）。
- (2) 西山尚志「香港より新たな出土文獻の發見—湖南大學嶽麓書院所藏の秦簡—」（『中

- 國出土資料學會會報』38號、2008年7月)。
- (3) 彭浩・陳偉・[日]工藤元男主編『二年律令與奏讞書—張家山二四七號漢墓出土法律文獻釋讀—』(上海古籍出版社、2007年8月)。
- (4) AMS法については、例えば吉田邦夫「最新の年代測定法ではかる縄文土器」(『化學』54-9、大阪、1999年9月)に、専門家以外にも分かりやすいように説明されている。
- (5) 福田哲之『文字の発見が歴史をゆるがす—20世紀中國出土文字資料の證言—』(二玄社、2003年3月)96~99頁。
- (6) 「馬承源先生談上博簡」(『上博館藏戰國楚竹書研究』、上海書店出版社、2002年3月)3頁に、上海博楚簡の炭素14年代が「距今時間爲2257±65年」とあり、上海博楚簡は2度に亘って買い戻されたとある。しかし、我々調査團は今回、嶽麓書院へ行く前に上海博物館を訪問したのであるが、その時の濮茅左先生のお話によると、4度に亘って骨董市場から買い戻されたとのことであった。濮茅左「上博館藏戰國楚竹書的發現收購過程」(『簡帛研究網、<http://jianbo.sdu.edu.cn>、2007年12月4日)にもそのことが書かれており、1994年3月12日に400枚餘り、同年4月27日に2組別々に合計800枚餘り、2000年3月6日に400枚餘りの竹簡を購入したという。このことからすると、上海博楚簡を全て同一地點からの出土資料として扱うことには疑問符がつく。つまり、上海博楚簡と稱されている竹簡群について、現状ではその全てを上記の測定年代で考えてよいとは限らないのである。どの竹簡が何度目に買い戻されたものかという正確な情報が必要であるが、その情報が公表されていない現時点では、少なくとも各篇ごとに、年代を含めた眞偽を判断することが必要になるだろう。上述の経緯からいえば、特に後の方で公表された篇ほど、慎重に構える必要があるものと思われる。その上、この測定誤差±65年というのは、だいたい戰國中期から後期のどこかだろうとは分かるけれども、現在の日本考古で出される誤差と比較すると、かなり粗いものである。年代は出土遺物による考古編年や、出土文獻の思想内容による思想編年からも詰めることができるが、可能ならもう少し小さな誤差で測定できればと思う。こうした事情については、既に西山尚志「上海博楚簡研究會—併せて『出土文獻と秦楚文化』創刊號出版の紹介—」(『中國出土資料學會會報』26、2004年7月)が述べている。その西山氏からの又聞きではあるが参考までに述べておくと、日本のある考古學関係者は、この誤差のような數値が出れば測定し直すと話したそうである。
- (7) 毎日新聞舊石器遺跡取材班『發掘捏造』(新潮文庫、2003年6月)、毎日新聞舊石器遺跡取材班『古代史捏造』(新潮文庫、2003年10月)。この問題は、資料の偽作を直接行った人物だけに止まらないことが分かる。岡村道雄『縄文の生活誌』(講談社學術文庫、2008年11月)補章「遺跡捏造事件について」は、考古資料の捏造を見抜けなかった第一線の考古學者による記録である。岡村氏の身に起こった事は、中國出土資料の研究者にとって、決して他人事とはいえないだろう。なお周知のように、この事件は出土地點・狀況が明らかなはずのものだった。だから悲しいことに、そういうものでも100%安全とは限らない場合があるわけである。
- (8) 似たようなことは、分野が中國美術史と異なるが、戸田禎佑「中國繪畫寫眞アーカ

イヴの未来」(『明日の東洋學』No.5、2001年3月)4頁にも書かれている。そこで戸田氏は、中國繪畫を偽物の疑いのあるものも含めて網羅的に寫眞化したことについて、周圍から批判もあったが、「私見抜きに資料は網羅的であったほうがいいのである。」と述べている。無論、これは資料収集・データベース構築に関する見解であり、疑わしい資料で研究をどんどん進めていけばよいという趣旨ではない。それから資料が例え本物であったとしても、そこに書かれていることからストレートに歴史を再構成してよいというわけではない。このことについては別種の出土資料研究を題材として、本誌所収の拙著「張家山漢簡『二年律令』研究—家族研究を中心に—」で触れている。嶽麓書院秦簡を扱うにあたっては、2つのレベルでの検討が必須ということになる。